

1 本年度の結果

①全国学力・学習状況調査 正答率平均

教科	国語	算数	理科
前年度結果 (対全国比)	70 (101)	62 (97)	()
本年度結果 (対全国比)	76 (113)	64 (110)	60 (105)

昨年度の西小学校の取り組み内容です。
年度当初に学校全体及び

②学習環境調査 icheck 【個人の心の安全 自己肯定感×学級適応感】

		1年		2年		3年		4年		5年		6年	
		6月	12月	6月	12月	6月	12月	6月	12月	6月	12月	6月	12月
A	人数(人)	22	27	33	27	34	35	28	29	33	34	20	24
	割合(%)	43	52	56	51	45	57	47	49	41	45	31	36
B	人数(人)	18	20	14	19	32	25	22	17	35	27	26	27
	割合(%)	35	39	24	36	43	40	37	29	44	36	40	41
C	人数(人)	4	3	8	4	3	0	5	7	3	5	3	1
	割合(%)	7.7	5.9	14	8	4	0	8	12	4	6	5	1
D	人数(人)	6	2	3	3	6	1	2	6	9	10	14	10
	割合(%)	12	3.9	0.1	6	8	1.6	3	10	11	13	22	15
E	人数(人)	1	0	1	0	0	1	2	0	0	0	1	2
	割合(%)	2	0	0	0	0	1.6	3	0	0	0	2	3

③学習環境調査 icheck 【クラスの成長力 規律と思いやり×発信力】

		1年		2年		3年		4年		5年		6年	
		6月	12月	6月	12月	6月	12月	6月	12月	6月	12月	6月	12月
A+B型	人数(人)	35	40	42	34	49	36	41	37	51	45	30	30
	割合(%)	69	77	71	64	65	58	69	63	64	69	17	46
A+C型	人数(人)	35	36	23	27	33	29	42	41	41	36	27	28
	割合(%)	69	69	39	51	44	47	71	69	51	36	16	43
A+D型	人数(人)	41	38	38	23	43	35	44	38	56	43	43	45
	割合(%)	80	73	64	43	57	57	74	51	70	53	25	69
B+D型	人数(人)	16	16	36	26	42	33	17	18	39	40	37	37
	割合(%)	31	31	61	49	56	53	28	31	49	64	22	56
C+D型	人数(人)	16	12	17	20	26	26	18	21	29	31	34	35
	割合(%)	31	24	29	38	35	42	30	36	36	31	20	53

④学力定着調査(R6 NRT、R7標準学力調査)

		1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	前年度結果 偏差値平均			51.3	53.1	52.2	48.3
	本年度結果 標準スコア	49.4	47.9	50.8	47.9	51.5	51.3
算数	前年度結果 偏差値平均			51.5	49.8	55.2	50.1
	本年度結果 標準スコア	53.6	52.3	50.2	50.8	54.3	53.2
理科	前年度結果 偏差値平均			51.3	50.3	46.9	47.9
	本年度結果 標準スコア			51.2	51	52.6	51

2 本年度の取組について

①調査から明らかになった課題

【全国学力・学習状況調査をうけて】 1 国語科 ●国語科(県対比110) ●国語科の課題として、必要な情報を抽出する問題の解答率が44.1であり、到達率が低かった。具体的には、資料を何点か読み、その根拠をふまえて、あてはまる言葉を選ぶ設問である。目的を意識して長文を読み、短時間で適切な言葉を選ぶ力を育成する必要があると考える。 ●全体的に数値が向上している傾向にある。きめ細かい漢字の指導と日常の練習が効果を上げていているといえる。また、学校全体が国語科の指導を研究の中心として、授業指導において指導のねらいを明確にして取り組んだ成果が表れていると考える。このように、成果があった点について、取り入れてさらに向上させる取り組みが望まれる。 2 算数科 ●算数科(県対比108) ●共通する単位分数の幾つ分になるか説明する問題の到達率が全体の中で低く(34.9)課題があった。具体的には、共通する単位分数のいくつ分になるかを答える設問である。「もともになる量」の理解が不十分であると考える。 3 理科 ●理科(県対比101) ●「エネルギー・粒子」の到達率が低かった(9.5)。全国平均にも到達していない。金属が磁石と電気に反応する性質を問う問題である。 ●「生命」の到達率が低かった(54.0)。全国平均を8ポイント下回っている。ヘチマの種子の発芽にかかわる条件の問いである。	【標準学力調査をうけて】 1年 ●国語科について、伝えたいことを文章に書く設問と、話し手の話に関わる質問を考えた文章で書く設問で誤答や無回答が多く、設問の意図が伝わっていないかったり、文章を書くことに抵抗があったりという課題がみられる。 ●算数科について、線分図から式と計算を考えた設問の定着率が低い。説明をする設問の定着率が低い。総じて思考を積み重ね関連させる問題について、解答率が低い傾向にある。 2年 ●国語科について、課題を明確にして作文を書く設問に無回答が多く、深く考える傾向が高まると無回答の率が増える。どう答えを導き出すのか見通しがもててない課題がある。 ●算数科について、あまりの処理をして正しい答えを求めることや棒グラフの読み取りに課題がある。 ●理科について、植物の育ち方と影と太陽の位置関係に関する理解に課題がある。 3年 ●国語科について、漢字の書き取りと文章を読んで感じたことや考えたことを共有することに課題がある。 ●算数科について、単位量当たりの大きさを求めた問題の定着率が低い。説明をする設問の定着率が低い。総じて思考を積み重ね関連させる問題について、解答率が低い傾向にある。 4年 ●国語科において、話し手が伝えたいことの中心を捉えることに課題がある。また、相手や目的を意識して伝えたいことを明確な問題の正答率も低い。 ●算数科において、小数第一位と小数第二位の計算と、角の性質をもとに角の大きさを求める問題に課題がある。 ●理科において、回路のつなぎ方の問題を解くことに課題がある。 5年 ●算数科について、単位量当たりの大きさを求めた問題を解くことに課題がある。また、記述式の問題の正答率が低い。 ●国語科について、読解力が定着していないことにより、文章全体の構成や展開を考えて書くことに課題がある。 ●理科について、植物のつくり方について理解が乏しく、相違点などを適切に判断できない課題がある。 6年 ●国語科について、敬語についての理解や文章全体の構成や書き表し方などに着目して、文章を整えて書くことに課題がある。 ●算数科について、比を使って全体から一方の量を求める問題を解くことに課題がある。また、記述式の問題の正答率が低い。 ●理科について、物の働き方や生物と環境、動物のからだのつくりとはたらきに関する理解に課題がある。
【icheck 1回目をうけて】 ●「学習が分かる」の到達度と比較して、学習意欲の到達度が低い傾向にある児童が多い。 ●学級満足度は全体的に低くはないが、どの学級にも満足度の低い児童がいる。 ●家族に対する不満を持っている児童が多く、生活習慣に課題がある児童も多い。 ●普段の状況では課題はないが、回答には課題があることがうかがえる児童がおり、表面上では把握できない児童がいることが分かった。	【icheck 2回目をうけて】 ●学習意欲の到達度が低い傾向にある児童が多かったが、若干減少傾向にある。日常的な取り組みを今後も継続していく。 ●学級満足度は全体的に低くはないが、どの学級にも満足度の低い児童がいる。 ●生活習慣、学習習慣に課題がある。ある程度改善された児童もいるが、学校全体の課題である。 ●普段の状況では課題はないが、回答には課題があることがうかがえる児童について、この調査を検証することにより変容がつかめた。この検証を参考にして、表面上では把握できない児童への個別指導に努める。

②課題改善に向けた学校組織全体の重点目標・取組

取組(上記課題を踏まえたもの)	具体的方策(継続して取り組めるもの)	検証指標及び時期
【全国学力・学習状況調査の結果から】 1 国語科 ●本校の研究テーマをふまえて、論理的思考力と表現力の育成に努める。そのために、目的を明らかにして情報を整理する力を育成する。 ●必要な言葉を見つける力を育成する。そのために、問題文の意図を理解し、挙げられた情報を選択する場を設定して具体的に指導していく。 2 算数科 ●「もともになる数」という概念形成を低学年から行う。単位や計算においても、もともになる数を明らかにして説明させるとか、計算においてもなぜその計算になるのかを説明させる指導をしていく。 ●夏季研修において、1学期の学力到達度で明らかになった課題を、「学力向上に向けた各学年の取り組みシート」に整理し、指導の計画を立てた。それに基づき、授業やドリルタイムを使って定着を図る。 3 理科 ●課題がある領域については、意図的に取り上げて指導をしていく。生育の観察など視点を明らかにして指導し、課題克服に努める。	全教科を通して ●単元末テスト前に複数で指導にあたる。 ●4年生には習熟度学習を取り入れ、5・6年生には教科担任制を取り入れ指導にあたる。 ●夏季研修において、単元末テストの結果などをもとに改善点と取組の方策を「学力向上に向けた各学年の取り組みシート」に設定した。これをドリルタイムや復習において、指導する。 1 国語科 ●授業研究を行う中で、教材研究をすすめ、授業のねらいと到達について情報を整理し、ブレない授業を行い情報処理能力の育成の基盤とする。 ●問題文の解き方を取り立てて具体的に指導していく場を設ける。 ●「もともになる数」という概念形成を行うことを常に意識し、算数科の授業を行う。導入や説明において、言葉を用いさせるなど理解を深める指導を行う。 ●問題文の解き方を、授業やドリルタイムで具体的に指導していく。 3 理科 ●課題がある領域(エネルギー・生命)については、授業で取り立てて指導を行う。 ●仮説・検証・結果の説明を授業において指導し、定着を図る。	●学期末において、学年で課題克服に向けたドリルタイムの実施【100%】 ●学年末単元テスト到達度【1・2年(90点以上)3・4年(85点以上)5.6年(80点以上)】 ●「学力向上に向けた各学年の取り組みシート」について、月1回進捗状況を連絡会で確認する場をもつ。【100%】
【標準学力調査から】 1学年 ●学年のまとめの学習を活用して、課題がある領域について、類似問題を作成し、意図的に指導を行う。また、文章で答える問題を取り組む時間を確保する。 2学年 ●学年のまとめの中で、再度問題にあたらせ、考え方を指導する。また、日常の授業において思考をつなげることを意識して指導し、定着状況をつかんでいく。 3学年 ●学年末のまとめの時間を活用して、課題がある領域について、意図的に取り上げて指導をしていく。また、考えの共有の時間では、自分の意見を伝えるだけでなく、友達の見えをもとに考えたことを伝える時間も確保する。 4学年 ●ドリルタイムの時間を活用して、今回課題にあがった内容の問題を重点的に取り組んでいく。また、どの教科においても説明する学習では伝えたいことを全体で確認して明確にした後、説明させるようにする。 5学年 ●ドリルタイムの時間を活用して、各教科の課題領域をプリントや小テストなどで改善を目指していく。また、日記を書く際に、文章の構成や展開を意識付けた取り組みをし、ペアなどで伝え合う活動を設け自己表現の向上に繋げる。また、授業で、単位量当たりの大きさの理解を深めるために数直線図がかけられるように指導する。 6学年 ●ドリルタイムやまとめの時間を使って、課題がある内容について重点的に指導していく。また、国語科の学習を中心にして、「書くこと」の単元等で文章構成を整理して書く活動を取り入れていく。また、授業で、割合に関わる問題を重点的に繰り返し取り組む。	1学年 ●ドリルタイムを活用して、類似問題に取り組み、解説をする。 ●やりきるタイムにおいて個別指導を行う。 2学年 ●ドリルタイムを活用して、様々な問題にあたらせ、必ず解き方の説明をしていく。また、個別指導を時間をみつけておこなう。 ●やりきるタイムにおいて個別指導を行う。 3学年 ●漢字の書き取りの小テストを1週間に1回行う。また、R80の交流場面において、友達の意見を自分はどう捉えたのか伝える時間を確保する。 ●やりきるタイムにおいて個別指導を行う。 4学年 ●ドリルタイムでは、現在算数科に重点をおいて取り組んでいたが、今後は国語科も取り入れて学習していく。また、国語科の「十年後のわたしへ」では、手紙を書く際、文章構成の仕方を全体で確認した後、取り組ませるようにする。 ●やりきるタイムにおいて個別指導を行う。 5学年 ●段落意識を育むために、1段落1内容の指導をしたり、2週間に1回もしくは学年末に小テストを実施したりして、定着を図る。また、ドリルタイムで単位量当たりの大きさに関わる問題を反復して行う。 ●やりきるタイムにおいて個別指導を行う。 6学年 ●ドリルタイムで月、水曜日を国語科、火、木曜日を算数科、金曜日を理科と設定し、それぞれの課題に継続して取り組む。また、国語科の「伝えよう。感謝の気持ち」の学習では、発表原稿を書く際に、文章構成や書き表し方を吟味して書く活動を行う。また、授業で割合の学習の理解を深めるために、関係図や数直線図を活用できるように指導する。 ●やりきるタイムにおいて個別指導を行う。	1学年 ●学年末単元テスト(国語、算数)達成率平均90点以上 2学年 ●学年末単元テスト(国語、算数)達成率平均90点以上 3学年 ●学年末単元テスト(国語、算数、社会、理科)達成率平均85点以上 4学年 ●学年末単元テスト(国語、算数、社会、理科)達成率平均85点以上 5学年 ●学年末単元テスト(国語、算数、社会、理科)達成率平均80点以上 6学年 ●学年末単元テスト(国語、算数、社会、理科)達成率平均80点以上
【icheck(1回目・2回目)から】 ●課題がある児童においては、生徒指導・いじめ・不登校対策委員会で課題を把握・分析し、組織的に取り組みを行う。定期的に変容を確認していく。 ●家庭連携が必要な児童は、管理職の指導のもと全校体制として組織的に取り組む。 ●教師が児童に寄り添っているか、肯定的評価を行っているかなど教師の指導について、学年や学校で協議しながら改善を図る。	●月1回、生徒指導・いじめ・不登校児童対策委員会を開催し、その場で個票を使って児童の変容を検証し取組を確認する。 ●気になる児童について、連絡会で情報を共有し、取組の方向性を確認する。 ●学年会で集団の変容や改善点を協議していく。 ●学級活動の充実を図る。	●icheck「自己肯定感」「学級適応感」のクロス集計結果が全国平均以上の児童の割合【100%】 ●月1回、生徒指導・いじめ・不登校児童対応委員会を開催する。【100%】 ●全ての児童に、学校内(学校外も含めて)に「学ぶ場」があるについて児童アンケート【肯定的評価100%】